平成27年度　海津市日新中学校区　研究構想図（２/2年目 案）

すべての児童生徒の「心の居場所」と「絆づくりの場」となる 魅力ある学校づくり

【地域の実態】
- 児童生徒の子供会行事、地域行事への参加率は高く、地域との連携が図られている。
- 保護者の学校行事に対する関心も高く、学校行事や授業参観には多くの保護者が参加する。

【児童生徒の実態】
- 温和で素直であり、明るく元気な挨拶をすることができる児童生徒が多い。
- 学習面においては、基本的な学習習慣が定着し、落ち着いて学習に取り組むことができる。
- 学力や学習意欲の差が大きく、学級等への所属意識が低い児童生徒がいる。

【目標】

教科の授業や特別活動で主体的に取り組める場を設け、自ら学んだり自主的に活動したりして、互いのよさを認め合い、高め合う児童生徒を育成する。

【取組】

分かる・できる授業、児童会及び生徒会活動、小・中連携及び小・小連携を通じ、協働して成し遂げる喜びや楽しさ、責任を果たす満足感を実感させる。

＜取組１＞　授業づくり
◇自己の変容を実感し、自ら学ぶ力を付けるための学習習慣づくりと分かる・できる授業づくり

＜取組２＞　集団づくり
◇自己存在感、自己有用感をもたせるための児童会・生徒会と学級とをつなげた集団づくり

＜取組３＞　連携づくり
◇児童生徒の発達段階に応じた指導を積み上げるための小・中 及び 小・小連携

◆「授業スタンダード」に基づいた指導改善の工夫
- 学ぶ気持ち、学び方、学習する習慣を身に付け、自ら学ぶ児童生徒の育成に向け、いつでも、どこでも、誰でも同様、同レベルの学び方ができるよう、共通実践や相互点検により、各校のスタンダードを改善・更新していく。

◆「分かる喜び、できる喜び」を実感させる指導改善の工夫
- 教科の本質に基づいた授業づくりを行う。重点として、必然性のある課題提示、学習状況点検及びまとめの時間を設定し児童生徒の学習状況を見届ける。
- 教師による認め、価値付け、児童生徒同士の認め合いの場を通して、自己の変容を実感できる指導を継続する。

◆学級や学年等の集団活動を支える児童会・生徒会活動の充実
- 児童会・生徒会と学級との連携を図り、行事や学級活動、児童会・生徒会活動の取組や日常的な活動の中で、一人一人の児童生徒が主体的に活動できる場を設定する。
- 異学年集団との関わりを通して、児童生徒が活動の目標をつくり、目標達成の方法を話し合って決めたり、役割を分担して協力して取り組んだりすることで、自己有用感を味わえる望ましい集団活動を展開する。

◆児童生徒が相互に努力や成長を認め合う活動の充実
- 年間を段階的にとらえ、一日の活動の評価として「よいことみつけ」を短学活動等で位置付ける。教師は、仲間の行動の背景にある思いや願いに気付かせる問い返しや価値付けを継続して行う。

◆拠点校の事業担当者を中心とした教員の連携と協働
- 小・中学校教員による相互参観や授業研究会を通して、児童生徒一人一人の適応状況を踏まえた情報交流により、授業改善や集団活動に児童生徒が確実に位置付くようにする。

◆基礎学力の定着に向けた指導改善の工夫
- 海津市統一テスト（5年生）の結果分析を行い、指導の在り方と個に応じた指導を明らかにする。
- 授業と授業をつなぐための、終末の展開や導入の手立ての工夫や、授業と家庭の学習をつなぐ家庭学習の進め方について情報交流し、指導改善を図る。
- 小学校での教科担任制（一部）を実施する。

PDCAサイクル（個と集団の側面から）

調査研究委員会

小・中連絡協議会

小・小連携チーム会議

意識調査（年3回）及び結果分析
～100％に到達していない児童生徒、集団に埋もれてしまう児童生徒にも目を向ける～

平成 26・27 年度　国立教育政策研究所指定

『魅力ある学校づくり調査研究事業』

すべての児童生徒の「心の居場所」と「絆づくりの場」となる 魅力ある学校づくり

海津市立 日新中学校　海津市立 高須小学校　海津市立 吉里小学校
海津市立 東江小学校　海津市立 大江小学校　海津市立 西江小学校

岐阜県海津市日新中学校区　１年目の実践

『魅力ある学校づくり調査研究事業』とは・・・

家庭教育や地域社会の変化に伴い、学校や地域が直面する児童生徒の生徒指導上の諸問題は多様なものとなっています。こうした中、小学校及び中学校における不登校児童生徒の人数は、依然として高い水準で推移しており、これら児童生徒の将来の社会的自立にとって大きな問題となっています。

そこで、文部科学省国立教育政策研究所は、不登校やいじめの未然防止を推進するため、都道府県教育委員会及び指定都市教育委員会と連携し、児童生徒の豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成する「魅力ある学校づくり」についての調査研究事業を実施しています。

この事業では、年３回実施する児童生徒の意識調査をもとに、児童生徒が学校生活をどのように感じているかを捉えて改善を図っていきます。そして、各地域におけるすぐれた取組を広く全国の学校や教育委員会等に周知することを趣旨としています。

平成２６年度より２年間、この事業の指定を受けた海津市日新中学校区の１中学校と５小学校は、学校がすべての児童生徒にとっての「心の居場所」となり、仲間との「絆づくりの場」となるよう、連携して様々な実践に取り組んでいます。

日新中学校区の児童生徒の実態
- ○温和で素直。学校の伝統を大切にし、役割を誠実に果たす。
- ▼自分で考えて行動することがやや苦手。
- ○落ち着いて授業に取り組み、知識・理解の面では向上。
- ▼仲間と意見を出し合い、練り合い、考えを深め合う力が不足。
- ▼個々の学力や学習意欲の差が拡大する傾向。

課題　授業や特別活動に主体的に取り組む姿が増えたが、学力や学習意欲の差が大きく、学級等への所属意識が低い児童生徒がいる。

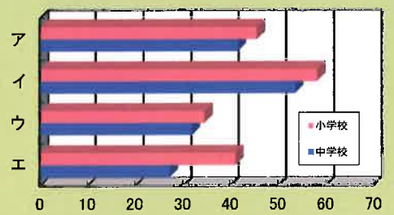
目標　教科の授業や特別活動で主体的に取り組める場を設け、自ら学んだり自主的に活動したりして、互いによさを認め合い、高め合えるようにする。

取組　分かる授業、児童会及び生徒会活動、小・中連携及び小・小連携を通じ、協働して成し遂げる喜びや楽しさ、責任を果たす満足感を実感させる。

ＰＤＣＡサイクルを生かした 今年度の実践

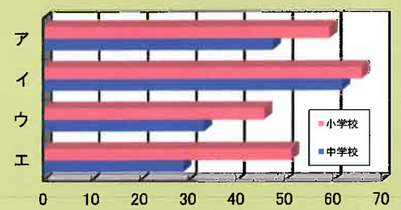
※ 下のグラフの数値・・・共通項目ア～エで「当てはまる」と回答した児童生徒の割合。
＜項目＞ ア：学校が楽しい　イ：仲間と何かをするのは楽しい
ウ：授業に主体的に取り組んでいる　エ：授業がよく分かる

第１回意識調査（H.26.3）の結果より



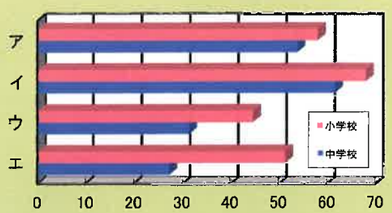
- 肯定的な回答は多いが、「当てはまる」と言い切れる児童生徒があまり多くない。
- 学年が上がるにつれて、肯定的な回答が減少する傾向がある。
- 学校ごとに数値にばらつきがある。
- 真面目に努力している学年で「当てはまる」の数値が低い場合がある。

第２回意識調査（H.26.7）の結果より



- 全体的に数値が向上したが、数値の伸びに学校間の差が見られる。
- 授業に関する項目で数値が上昇しても、なかなか学力向上に結びつかない。
- 独自項目の自己有用感に関する数値が低い。
- 回答の理由を分析することで、個々の実態や学年ごとの意識の傾向を捉えやすくなった。

第３回意識調査（H.26.12）の結果より



- 集団づくりの面でかなり数値が向上したが、数値の伸びに学年間の差が見られる。
- 学習面では、やや伸び悩みが見られる。
- 自己有用感に関する数値はやや向上したが、まだまだ低い。努力している児童生徒、リーダー的な児童生徒の数値が高いとはいえない。

連 携 づ く り

６校の事業担当者が連携して、各校の実践の共通点や差異を検証し、共通実践できることを明らかにしながら、全職員が同じ意識で指導に当たることができるようにしている。

１回目に話し合ったこと

- 集団づくりに関する項目（ア・イ）より授業づくりの項目（ウ・エ）の数値がやや低いので、まずは授業スタンダードの徹底を図る。
- 「当てはまる」と言えない理由や実態と数値のギャップについての要因を捉えるために、第２回意識調査から、回答の理由を記述させる。

各校の「授業スタンダード」と「特別活動の方針と計画」を相互点検し、共通実践できる点を明確にした。

２回目に話し合ったこと

- 授業スタンダードの定着によって、学習姿勢が整ってきたので、さらに「分かる授業」を目指して授業改善を図る。
- 児童会・生徒会活動を生かして日常生活の基盤を作ることができたので、さらに児童生徒が主体的に活動できる場をつくる。
- 児童生徒のよさを認める手だてをさらに工夫し、自己有用感を高める。

海津市統一テスト（小５）の結果分析から、算数の基礎力向上に力を入れる必要があると考え、指導方法を工夫した。

３回目に話し合ったこと

- 学校行事を通して主体的に活動する場面を位置付けたことで、集団への所属意識や仲間との一体感、達成感を得ることができた。
- 授業スタンダードの徹底が図られ、児童生徒の実態に合った授業改善や活動が行われたが、さらに主体性を高めるためには、話し合い活動を位置付ける必要がある。

小学校：事業担当者が各学年部の検討会に参加して、学年間・学級間の実践の差異ついて指摘し、見届ける。

中学校：職員の意識調査を実施し、共通実践が図られているかを確かめる。次回から、独自項目「自分は学校で誰かの役に立っていると思う」にも回答の理由を記述させる。

岐阜県学力状況調査（小５・中２）の結果を分析し、成果と課題を明らかにする。

集 団 づ く り

学級や学年等の集団活動を支える児童会・生徒会を充実させ、集団に貢献する姿を創りだし、その姿を認め合うことで、集団への所属意識と自己有用感を高めている。

従来から継続して取り組んでいること

あったかい言葉かけ運動「よさ見つけ」・「よいこと見つけ」

児童生徒が互いの活動する姿を見て、努力や成長を認め合う場を位置付け、自己有用感を高める。

児童会・生徒会活動と学級活動の連携

- 児童会・生徒会を中心として、学校生活向上のための活動を展開し、これに関わって、各学級で児童生徒一人一人に集団に貢献する役割をもたせる。
- 「委員会班制度」に基づいて、学級での「一人一役」を位置付ける。（中学校）

異学年集団による活動づくり

異なる学年集団が一緒に行う活動を展開し、高学年がリーダー性を発揮する場、低学年が目標や見通しをもつ場を位置付けることで、自己有用感を高める。
小学校：「ふれあい遊び」「仲良し班活動」
中学校：「モデル授業」「班会交流」など

児童会、生徒会が企画・運営する行事

学校行事を通して、児童生徒が責任もって役割を果たす場を位置付け、集団に貢献することで仲間とともに創り上げる喜びを味わわせる。
小学校：「運動会」、「焼きいも会」等
中学校：「体育大会」、「合唱発表会」等

「ひびきあいの日」全校集会

- 人権週間にあわせて、人権感覚を高め、差別やいじめのない学校や仲間関係をつくるために全校集会を行う。
- 「本当に安心できる学校・学級」「もっとよい学校」にするために、児童生徒が集会を通して呼びかける。

意識調査結果を受けて新たに取り組んだこと

伝え合い広める「よさ見つけ」（小学校）

毎日の帰りの会でカードを交換して互いのよさを伝え合い、そのカードを教室のよさ見つけコーナーに掲示して広めた。また、他学年のよさも見つけるようにし、校内に掲示して、全校的な活動に発展させた。

全校に広める「よいこと見つけ」（中学校）

生徒会執行部や委員長が仲間のよさを見つけ、給食時に食堂で全校に紹介したり、その内容を校内に掲示したりして広めた。

全校が一丸となった「よさ見つけ」（小学校）

縦割り班や登校班、行事で関わった仲間などによさ見つけカードを書いて手渡すとともに、カードの内容を全校放送で紹介した。

日常的な「よいこと見つけ」（中学校）

体育大会をきっかけに、帰りの会で互いのよさを見つけてカードに書き、廊下に掲示する活動を日常的に行うようにした。

あったかい言葉かけを広げる活動（小学校）

- 全校で、仲間を思いやる「ほかほか言葉」をかけ合い、その時の気持ちを集会で話すことを通して温かい気持ちの輪を広げた。
- 全校で話し合って決めた「なかよし宣言」の内容を受け、全校でよさを見つけ合って、「なかよしの木」に「よさみつけの葉」（メッセージカード）を貼り、掲示した。

生徒会主催の「人権集会」（中学校）

従来からある「生徒会宣言」を基盤として、生徒会執行部が中心となり、ネットいじめに関するパネルディスカッションを行った。ネットいじめを起こさないためにも、互いのよさを見つけ、認め合うことの大切さを確認した。

先生が発信する「よいこと見つけ」（中学校）

教師が見つけた児童生徒のよさを全校に紹介することで、よい姿の裏にある願いや思いを広め、よさを見つける視点を示した。

異学年集団活動の充実

異学年集団活動において、最上級生が誇りをもって手本を示したり、下級生が進級に向けて目標をもって活動したりする姿を互いに認め合い、自己有用感を高め合える場を位置付ける。
小学校：「６年生を送る会」、「花咲集会」、「伝統を引き継ぐ会」等
中学校：「３年生と語る会」、「兄弟学級道徳授業」、「学級ブランド（誇れる活動）交流」等

授 業 づ く り

「授業スタンダード」に基づいた授業づくりによって、児童生徒が分かる・できる喜びを感じ、達成感や満足感を味わえるようにしている。

従来から継続して取り組んでいること

「授業スタンダード」の定着

海津市の「授業スタンダード」は、どの教員が指導しても同様の学び方を身に付けさせることができるよう、発達段階を考慮しながら９年間を通した授業づくりを行う手だてである。

「授業姿勢のスタンダード」
①聞く姿勢：話し手に体を向ける
②話す姿勢：聞き手が見える位置で話す
③挨拶：学習環境を整えて気持ちの切り替え
④挙手：ハンドサインを使う
⑤授業前学習：教科係の進行と教師の支援

「授業展開のスタンダード」
①１０分以内の課題提示
②きちんと教える「前半学習」
③つまずきへの方針を立てる
「学習状況点検」（中間チェック）
④全員が目標達成に向かう「後半学習」
⑤振り返り、次につなげる「まとめと評価」

児童生徒による授業姿勢向上の活動

- 教科係を中心に、授業姿勢の呼びかけや授業前学習に取り組む。
- 学習委員会等が進める「授業評価」では、「聴く姿・話す姿」などの基本的な姿勢を自分たちで高め、先生に評価してもらう。（中学校及び一部の小学校）

ハンドサインの活用

「ハンドサインを使って仲間の発言に反応することは授業に参加すること」だという意識をもって指導し、児童生徒が互いを認め合う手だてとしても活用する。
- 「分からない」を示す「グー挙手」を生かし、教え合いにつなげる。（中学校）
- 同意を示す「３本指挙手」を分類して自分の発言に自信をもたせ、付け足しや質問を増やす。（中学校）
- 「チョキ」（付け足し）から「パー」（賛成・分かった）へと指名し、自分の言葉で話せたことを価値付ける。（小学校）

意識調査結果を受けて新たに取り組んだこと

学校間での授業交流

各校の事業担当者などが、互いの学校の授業研究会に参加し、授業姿勢や授業展開について学び合った。

「授業スタンダード」の充実

各校の実態や各教科のねらいに合わせて、より具体的にスタンダードを設定し、全職員で指導にあたった。

授業姿勢と学習意欲向上の取組（小学校）

- 委員会で月ごとの学習目標を考えて提案し、授業姿勢向上に取り組み、その結果をもとに次の目標を設定した。
- 「学び方名人になろう」という活動を展開し、仲間と競い合いながら「学習準備」「聞き方」「話し方」の３つの観点でレベルアップを図った。

分かりやすい授業づくり

- 学習の見通しをもたせるために児童とともに学習計画を立てた。（小学校）
- 教科担任制、少人数指導による個に応じた指導を行った。（小学校）
- 授業スタンダードの流れ、課題とまとめが分かる板書づくりを行った。

算数に焦点を当てた授業改善（小学校）

- 授業の終末１０分間で練習問題に取りませることによって、基礎的な計算力の定着を図った。（中学校でも導入）
- 図や式を使って自分の考えを話す力を伸ばすために、学習状況点検で全体交流を位置付けた。

小テストによる基礎学力の向上

- 「漢字検定」「学年チャレンジ」などを実施して到達度を確認した。（小学校）
- 全校学力向上テストを実施し、基礎力と学習意欲の向上を図った。（中学校）

他学年との授業交流

他学年と授業を見せ合い、認め合うことで、目指す姿を明確にもって授業姿勢を向上させようという意欲を高めた。

話し合い活動の充実

教師が意図的に授業の中で話し合う場面を位置付け、ハンドサインを有効活用する中で、児童生徒が自らの考えを伝える工夫をしたり、仲間の意見に関わって考えを深めたりする姿を大切にしながら、分かる授業を主体的につくりだす児童生徒を育成する。